

特集1：子ども向けドキュメンテーションが、語り合いの場と他者への興味を生み出した
特集2：今、考えるべき「保育現場の対話」

特集1：子ども向けドキュメンテーションが、語り合いの場と他者への興味を生み出した

ルクミーが主催する保育施設向け実践型オンライン研修「ルクミー みらい保育スクール」では、園・施設の課題解決や保育の質向上を目指す先生方を、さまざまな研修プログラムでサポートしています。その中のひとつである、往還型「ドキュメンテーション活用」コースに参加されたのが、かほる保育園の佐藤先生です。

かほる保育園さまでは、以前から保護者向けの簡単なドキュメンテーションを作っていたそうです。そこで今回は、子どもたち向けのドキュメンテーション作りに取り組みました。そのなかで、子どもたちと保育者に変化が表れたエピソードや、佐藤先生がドキュメンテーションに対して感じた効果、今後の目標について話していただきました。



(かほる保育園さまの外観写真)



(佐藤先生)

ドキュメンテーションが他の子の遊びを知るきっかけに

研修で掲げたチャレンジテーマは「大人も子どもも見て楽しめるドキュメンテーションを」です。もともと個別に遊ぶことの多い子どもたちが、ドキュメンテーションによって他の子の遊びに興味をもってくれたらと思い、このテーマに取り組むことにしました。

当園は開園時から保護者向けのドキュメンテーションを作成していましたが、それはあくまで活動内容を簡単に伝えるもの。

子ども向けにわかりやすいドキュメンテーションを作る頻度は、あまり多くありません。

そのため今回は、面白そうな遊びを子どもたち向けに大きく掲示し、遊びの共有ができればと思ったんです。

研修の期間中に生まれた「恐竜のたまご探し」という遊びにおいては、ドキュメンテーションだけでなく、子どもが見つけたものを実際に展示するという試みに挑戦。

展示したのは、恐竜の化石に似た木の破片です。

展示されたものを見て、さまざまな子が興味をもつ様子が見られました。

園内で起きている他の子の遊びに興味をもつきっかけが作れたと思います。

加えて、ドキュメンテーションを作ることで私自身も子どもの興味に気づけ、保育の振り返りもできていました。

実物とドキュメンテーションの掲示で興味の輪が広がった

ここからは、ドキュメンテーションを活用した「恐竜のたまご探し」という遊びの事例をご紹介します。

集団で遊ぶことが得意ではなくお散歩にもあまり参加しない4歳のE君が、ある日「公園で恐竜のたまごを見つけた」と教えてくれたことから恐竜のたまご探しが始まりました。

最初は私とE君の2人で園庭へ出て、たまごを探すことに。

すると4歳児のA君とR君もやってきて、一緒に探し始めたんです。

その日は結局見つからなかったのですが、翌日みんなで公園へ探しに行くことにしました。



(園庭でたまごを探している様子)

パラサウロロフスだ！！



(公園で化石を見つけたとき)

翌朝、普段はお散歩に参加しないE君が公園へ行くのを心待ちにしていた姿がとても印象に残っています。スコップや図鑑をリュックに詰めて、数人の子もたちで公園へ出かけました。

公園でもなかなかたまごが見つからなかったのですが、E君がパラサウロロフスという恐竜の頭に似た化石のような木の破片を発見したんです。

「たまごじゃないけど化石が見つかったね」とみんなで大盛り上がり。

E君はその破片を水道で丁寧に洗い、大切に抱きしめて持ち帰りました。

そして園のみんなが見られる場所に、持ち帰った破片をドキュメンテーションと一緒に展示することに。すると、破片が気になっておそろおそろ触る子やドキュメンテーションをじっくり読む子、「僕もこのとき一緒に行ったんだよ」と誇らしげに話す子など、さまざまな姿が見られました。

ドキュメンテーションと破片を展示している空間が、自然と「語り合いの場」になっていたんです。

普段、集まりの時間を設けていてもなかなか集まらないのですが、子どもたち向けのドキュメンテーションと実物の展示があったからこそ、このような場が生まれたのだと思います。



(恐竜コーナーのお写真)

その後、メンバーを変えて恐竜のたまご探し2回目を実施されたり、E君を慕う2歳児クラスの子達が恐竜の化石を探そうと意気込んでいたり、周りの子たちや先生たちにまで興味の輪が広がっていきました。

そして、2回目のたまご探しのドキュメンテーションも同じスペースに掲示。
2歳児の子が恐竜のたまごに似た石を見つけ、自分の足元に置いてたまごを温めるような動作をする写真も載っていて、あたたかい気持ちになりました。

この遊びをドキュメンテーションにしたことでE君に興味をもつ子が出てきて、E君の自信にもつながったのではないかと感じています。

子どもたちのいる場で作ればドキュメンテーションは変わる

今後は、ドキュメンテーション作成を子どもと一緒にやっていきたいと考えています。
子どもの声を聞きながら作ることで、保育者と異なる視点での興味や面白さ、心が動いた瞬間に気づけるのではないかなと思うんです。
そして、子どもたち向けのドキュメンテーションを掲示し続けることで、子どもたちがつながれる機会を保育者が保障していければと思います。

「子どもと一緒にドキュメンテーションを作る」を実現させる方法は模索中ですが、現時点では、子どもたちのいる場でドキュメンテーションを作ることがその答えだと考えて実施しています。
他にどのような方法があるのか、これからも考えていきたいです。

子どもたちがいる場でドキュメンテーションを作っていると、子どもたちが興味を持って寄ってきてくれます。
そこで交わされる会話を聞くことで、子どもたちの視点が見えてくる点がこの方法の良さだと感じています。
私自身も、子どもたちの顔を見ながら作ると楽しいんです。
もし時間外でドキュメンテーションを作ろうとして苦しくなっているようなら、子どもたちのいる場で作を試してみてください。
子どもたちの反応を見ながら作れば、ドキュメンテーションを作る楽しさや子どもたちの見え方も変わり、ドキュメンテーションの書き方も変わるかもしれません。

現在、恐竜のたまご探しブームは落ち着いています。
しかし私としては、また続きを行って新たな化石を見つける機会を作りたいと考えているため、恐竜コーナーを今後どうすべきか悩んでいるところです。これは私自身がこの取り組みを楽しんでいるが故の悩みかもしれませんね（笑）

大豆生田先生からのコメント



「公園に行って恐竜のたまごを見つけたい」という1人の子どもの声を拾い、それを共有していく先生の姿が非常にいいと思いました。
子どもの声を聞いて実際に見にいくというところがいいですね。
そして写真記録があることで、他の子の遊びに興味湧き、子ども同士の対話や共有が生まれ、そこから「育ち合い」や共通のテーマが生まれています。
これは、園という集団保育の場において非常に大事なことです。
1人の子どもの関心ごとが、壁面に写真などで掲示されることによってさらに深まっていく点も重要なポイントです。

「子どもと一緒に作っていききたい」という思いが実現すると、さらにいい取り組みになっていくでしょう。
先生が必ずしも「全員」にこだわっていない点もいいですね。

関わっていなくても興味をもつ子もいますし、まったく別のことがブームになっている子どもたちもいます。

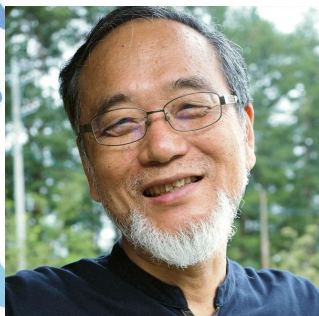
多様な参加のありようを大切にする先生の保育への思いや子どもの思いがよく見えてくる事例でした。
遊びは一度消えたように見えても、時間をおいて再びブームになることもあります。

複数の遊びやブームは並行して進むものなんです。

恐竜のたまご探しの環境は少し残しつつ、他の遊びも大切にして、いつでも続きができるように準備をしておくといいかもしれませんね。

特集2: 今、考えるべき「保育現場の対話」

2022年5月17日にユニファが開催した「みらいへの一歩セミナー」では、東京大学名誉教授であり白梅学園大学名誉学長の汐見稔幸先生に保育園を取り巻く社会状況を解説いただき、「これから選ばれる保育園になるためにはどうしたらよいか？」をお話いただきました。



汐見 稔幸
東京大学名誉教授・白梅学園大学名誉学長

歴史的に転換期を迎える保育園

日本では保育園が始まって100年近くの歴史があり、大急ぎで発展を遂げてきました。その歴史を経て、現代の保育園には次の2つの意味があります。

まず「社会になくてはならないインフラになってきた」ということです。元々は女性が安心して社会に出て働けるように社会で支えようというものでした。しかし今はお母さんが働いていなくても1歳や2歳から保育園を利用したいという親が増えています。保育園に見学に行くと「素敵な園がたくさんある」「プロに任せた方が子どもは良く育つ」と分かってきました。核家族化が進み気軽に外で遊ばせられない、ボタンを押せば電化製品が解決してくれる……このような社会では「自分達で作り出す文化」がなくなっていました。つまり、生活が子どもを育てた時代から、教育環境を社会が提供する時代になってきたのです。世界中で「保育園が人を育てる役割を担う必要がある」という流れになっています。今後日本でも3歳以降は義務教育に組み込まれるという議論が出てくるでしょう。

次に、少子化により待機児童問題が解消に進み「定員割れ・閉園をする園が確実に増えていく」ことも事実です。増やし続けていた園が、今度は「選ばれる園」のみが残っていくことになります。

保育園の必要性は増してきている一方で、保育園の数は減らさざるを得ないのが現在の日本の保育園の特徴です。

では社会の期待に応えるにはどうすればよいのでしょうか？ それは、「子ども達それぞれにその子らしく育てていく」つまり「質の高い保育」を提供する必要があります。そして、保護者からも地域の人達からも深く信頼されるような「選ばれる園」になる努力が必要です。

質の高い・選ばれる園になるためには

では「質の高い園」「選ばれる園」になるためにはどうしたらよいのでしょうか。難しく考える必要はありません。一言で言えば「あそこの園はいい園だね」と言われるような“世間から見たいい園”になることです。

また世間は「園全体としての雰囲気、園がかもし出している空気」から「いい園」かを感じ取って判断しています。

日本の幼児教育の基礎を作った倉橋惣三によれば、「“親子や家族同士がお互いを思いやり愛情をもって接している”このやり取りが子どもにとって最も家庭教育で重要だ」と言います。これは保育園においても同じだと私は考えます。

やわらかい園の風土を作るものはなんでしょう？

まず子どもと接する時の保育者の顔つきや声、言葉のやわらかさです。無駄な力が入っていないことです。窓を開けるにしても、「暑いから窓を開けてもいいかな」「ああ涼しい風が入ってきたね」と状況を丁寧に説明するような言葉をかける。このように子どもを丁寧に大切にしていこうという振る舞いや言動・姿勢が園の雰囲気を作っていくわけですね。

また保育者同士の会話にも配慮があり、思いやりがあること。子どものそばで「〇〇ちゃんって～」と子どもの話をしないことはもちろん保護者の悪口も言わないことです。

さらに環境衛生・安全に丁寧に配慮していること。目に見えなくても子どもがケガや事故が起こらないようにゴミや土を毎日きれいに掃除をしていきましょう。

そして、置いてあるおもちゃ・遊具・教具に品がありいいもの選ばれていること。どこの家庭にもあるような物をポンと置くのではなく、専門家として、玩具も研究し選び、配置することが求められます。

その実践のためのポイントを5つまとめてみました。

1つめは、子どもを子どもとして扱っているのではなく、一人ひとりを個性をもった人間としてリスペクトしていることです。分かりやすく言うと「子どもって面白い！すごい！」と本心で思っていることです。

2つめは、そのために子どもから学んだこと、「子どもって面白い！不思議！」と思ったことを毎日のように語り合えるような園であることです。

保育者が「～～してあげる」「教えてあげる」と思っているのは、苦手なことをたくさんさせる子どもにとってつまらない保育になってしまいます。

子どもは宝石の原石ですから、それを磨いていくように子どもからの学びを保育者同士で見つけて合わせるのが理想です。お昼休みの5分や10分でもそのような会話ができると、保育者はどんどんと伸びていきますよね。

3つめは保育士同士が経験の違いに関係なく、何でも話し合える関係があること。ベテランは新人を丁寧に支えていこうとしており、何かあれば相談しやすい関係性でありたいものです。「最近の新人は～」といった悪口が飛び交うような園では、やはり雰囲気もトゲトゲしいものになります。

書類仕事などに追われて大変だとは思いますが、園長や主任は先生達のことを一番よく知っていないといけません。園長やリーダーの先生方は「どうしたらもっと良い園になるか？」をフラットに語り合える環境づくりが重要な仕事になってきます。これを「同僚性を大事にしている」と言います。子どもと同様、保育者を人間として尊重しているからこそできることです。

4つめ、保護者のことを絶対に悪く言わないこと。保護者が「子育てってこんなに楽しいんだ」と喜びを感じるように援助し、苦情も保護者の立場を理解して相談にのることです。

5つめ、子どもは自ら「善くなろう」としていると信じていることです。何があっても子どもを叱らない、何か不安そうにしていれば「大丈夫？」と聞いてくれるような存在でありましょう。大人として子どもに期待するのではなく、子どものやりたいことを懸命に理解する、これが正に「子ども理解」ということですね。

地域の人々は園のステークホルダー

また社会のインフラとして必要とされる園になるためには地域の人々の存在も重要です。地域の人々を園のステークホルダーと理解して、助け、助けられる存在を目指しましょう。子どもの食育の場面では地域の魚屋さんに来てもらい、さばいてもらう。土日になったら園の会議室やコピー機を使ってもらい、集まりを気軽にしてもらう。

地域のニーズをつかみ、園ができることを提案していくことで、ただの保育園ではなく「保育園はこの地域の財産なんだよ」と地域の人々に必要とされるようになります。

厳しい時代になってきています。派手な園や目立つ園になるのではなく、子どもに謙虚で、保護者を信頼して、地域の人々の財産となることを目指して地道な努力を重ねている園が選ばれる園となるでしょう。私達自身が支えてもらっているという意識を忘れないようにしましょう。皆さんも「ここからならやれる」という事を見つけて、一歩前に出る努力を始めて下さいね。

子どもの成長がストーリーとして伝わるように

セミナーの最後では、ユニファのスタッフから汐見先生へ、「一人の保護者としても"保育士との対話"が必要だと感じた」事をお伝えし、「そのためにルクミーが出来る事は？」をディスカッションさせて頂きました。

13年間子どもを保育園に送迎していたという汐見先生ですが、「昼間の子どもの様子はなかなか分かりませんでした」とおっしゃいます。また連絡帳ではわが子一人が何をしたかは伝わるかもしれませんが、友だちとどうだったのかなどの把握はしづらいです。

そこに今の時代は、写真や動画が使えるようになってきたことで、お友達との関係性も分かり、全体の雰囲気も伝わりやすくなります。

一人に焦点を当ててではなく、クラス全体の関係もわかるようなストーリーとしても発信されること。その手法の一つとして、ドキュメンテーションを気軽にできるようになれば、子どもの可能性をもっと伸ばしていけるのではないかと期待感を寄せました。